

た点で共通している。彼らの基本的戦略は、論敵の主張を逆転して、(少なくとも革命的)社会主義の思想が、社会科学として要求される基本的な条件を充たしていないことを明らかにする点に向けられた。このような思想対立の図式の中では、「(社会)科学とは何か(何であるべきか)」という社会科学方法論が、体制選択において決定的な役割を果たす。そして現在我々がもっているもっとも優れた社会科学方法論は、このような厳しい思想闘争の背景の下で各々提示・擁護・批判されて鍛えられた、知的活動の成果なのである。この事態を橋本は、「方法の思想負荷性」という耳慣れない言葉で表現する。

彼はまず、一見類似して見えるこの三人の立場が様々の局面で相互に異なっており、場合によって正反対でもあることを、大胆な分類図式を次々に適用して論証する。ここで詳しく触れる余裕はないが、彼の多くの、それも一般常識からは外れる場合も多い断定的結論は、私自身がハイエクやポパーのテキストを長年読んできた印象とほとんど一致する(これは、私にとっては驚きである。ただしミーゼスについては、確信を持って語る資格が私には乏しい)。本書の価値の一部は、相互の比較を通じて、この三人の理論の基本性格が明らかになり、個々の理解が深まる点にあるが、それは、第一部の方法論にも、第二部の思想内容の分析についてもいえることである。この三人の誰が誰に近いのかの関係は、採用される分類視角によって、複雑に変化する。

本書の中心的主張として、社会科学方法論について彼が最終的に下す診断は、方法論がこの意味の思想を担うことはもはやできなくなっている、という点にある。つまり、社会主義圏の崩壊という歴史上の事態は、三人の展開したような「科学的自由主義」の理論的勝利や歴史的確証を意味するものではないのであって、何らかの科学方法論が体制選択に関して一方に軍配を揚げることはないのだ、と考えられるのである。

この結論は、(純粋な)科学研究方法論の側から事態を見る限り、ある意味では当初から予想されたものである。ラカトスの理論でも、一般に科学的理論の「核」には形而上学があって、これは反証不可能であるとされる。自然科学でもそうなら、通常の「理論の反証可能性」すら曖昧な社会科学では、なおさらであろう。一般命題として見るなら、ミーゼスのブラクシオロジーも、ポパーの開かれた社会論も、ハイエクの自生的秩序論も、有限の射程しかもたな

橋本 努

『自由の論法』

——ポパー・ミーゼス・ハイエク——

創文社 1994.12 32+272 ページ

若き才能を感じさせる野心的な本である。マルクス主義に代表される社会主義はかつて、自らの主張が「科学的」であることを強調し、論敵に非科学または反科学性を帰した。これに対抗して自由主義を擁護したポパー・ミーゼス・ハイエクは、議論の重点を、19世紀の科学万能幻想を引きずるマルクシスト達の水準以上に深められた社会科学方法論に置いて

いのは当然である。しかしそれらは、その射程内に敵がいるかぎり、それを倒すのではないか。その場合、倒される敵は、それを倒す側の理論と多くの認識上・価値上の前提を共有しているものでなければならない。前提をまったく共有しない敵を、(武力や経済ではともかく)理論において倒すことなどできないからである。

だからこれを逆に「思想」の側からなめるなら、三人が活躍した時代の暗黙の前提を含めた思想闘争の文脈とトポスの中において、(社会主義へと傾倒しつつある)具体的な個々の論敵と時代の精神に対しては、彼らの理論は有効性をもったし、その圏内に入る者には、今もっているはずである。ただ、橋本もいうとおり、現在その(かつて我々がそこにいた思想の)圏内が縮小しつつあるのは事実だと思われる。今や、社会主義ではなく、単純化された民主主義信仰と市場信仰の危険の方を真剣に憂慮すべきかもしれないからである。三人の理論の前提と方法がいかに相互に矛盾・対立するかを示すことによって、三人の思想の「毒抜き」を敢行しようとする橋本の背景にも、あるいはこのような状況認識があるのかもしれない。

ニュートン理論も、光速に近い相対速度で等速運動をする二つの系にまで拡張すると不整合がでる。社会科学方法論ならなおさら、そこで使われる言葉の一般の意味そのままに適用の対象を拡大して、時代の暗黙の前提からくる制約を無視する場合には、妥当しなくなるのは当然であろう。すべての一般論は、その意味内容において、常に強すぎる主張を行っているのだ、といってもよいかもしれない。これは特にケインズ理論について、ハイエクが繰り返し強調した点でもある。

次に、社会科学の方法を論じる橋本自身の方法を見てみよう。ルーマンの解説書は多いが、その難解な学説の意義を納得させてくれるものは数少ない。その点この本は、その少ない(私にとってはほとんどはじめての)例外である。用語の理解に骨が折れるが、わかりやすい部分だけ見るなら、次のようになる。科学システムがシステムとして存続するには、それが他のシステムに対する優位を(少なくともそのシステムに属する者の目から見て)保つこと(「正統性」と、そのシステム内で産出されるもの(理論)を評価し取捨選択させるもの(「妥当性」)が必要である。さもなくばそのシステムは、他のシステムに淘汰されるか、散逸して自己崩壊してしまうからであ

る。科学においてこれを与える機能を担うのが、「(科学)方法論」なのである。逆に言えば、この機能を果たすかぎりそれは真正の方法論であって、それが何によってこの機能を果たすかのルートは、複数存在する(代替可能性)。橋本は、正当化・発見法・領域設定・自己了解・限界論・価値操作という「(方法論の)六類型」を挙げ、その内部をさらに細分化している。このマトリックスにポパー、ミーゼス、ハイエクを位置づけ、それらの差異を明らかにして見せるのである。この三人はいずれも、思想負荷という価値操作を行うが、暫定的根拠論または演繹的方法による正当化とともに依拠するポパーとミーゼスに対して、(理性的)限界論から(学問の)領域設定へと進むハイエクは異質のルートをとる、と橋本はいう。この分類は明快で彼の方法の成功例である。ただ、ハイエクの位置づけはよいが、反証可能性による限界論は、ポパーにおいても独自の大きな役割を果たしているように、私は思う。

ただ、システム論の視角は、本来そのシステムの内容を捨象して、すべてのものをシステムとしての骨組みにおいて一種数学的に把握するところに成立するから、科学は、様々の宗教やカルトや神話共同体、あるいは国家や市場などと同じ側面において捉えられることになる。もちろん「(科学的)真理」(というメディア?)は「(宗教的)真理」「救済」「さとり」「(合)法(性)」「採算」などとは違うだろうが、それらが「同じ」機能を果たすかぎり、それがどう違うのかに踏み込む用意は、システム論からは出てこない。つまり存続するシステムは、そのようなものとして、ある意味で同等なのである。これが個々にどう違うのかの理解は、むしろシステム論の外にある我々の常識の中から調達されている。そうだとするなら、我々が、元々知っていること以上のものをシステム論から得られるのかどうかは、疑問になるのではないか。

むしろ本書の価値は、一旦大なる感動をもって三人の思想のどれか(または全部)を読み、それに影響されたことのある読者にとって、もっとも大きいように思われる。なぜならそのような読者は、それぞれの理論の全体的な力を理解しているために、その内容を意図的に無視することによって可能になるような、形式的な分析からも多くをえることができるからである。さもなくば、総合的な思想の建造物を個々のパーツに分解してそれらを吟味するような分析が、積極的な意義を持つことは少ないかもしれ

ない。

それ以上に気になるのは、方法論と方法の同視である。科学システムは、事実として存続しているが、それが方法論というメタレベルの言語使用とその産物としての個々の方法論の力によってそうしている、とは私には考えがたい。一級の科学者が、三流の方法論または科学哲学を述べることは、むしろ普通のことである。方法論システムと理論システムと応用研究システムとの三層構造になった科学システムのモデルは、単純なそれより魅力的だが、上位の層の言語化された産物がそのまま下位の層にとって必要な機能を果たしている、というのでは、まだ単純すぎるように思える(まず、少なくとも下位の層の成功が上位の層を支えるという視点は必要である)。これは、ルーマン流のシステム論が、(原理上無限の複雑性を許容する)事実的秩序としてではなく、(あくまで人間に把握可能な)言語と観念のそれとして構成される傾向が強いことの結果かもしれない。

唯一私が気づいた本書の誤り(少なくともミスリーディングな記述)は、ハイエクを心身二元論者とするような箇所である(83~84頁)。彼は①世界②脳内の刺激伝達ネットワーク③心、という三つの秩序のうち、②と③が同型でありうる、と主張する。これが①とは一見異なるという限度では二元論といってもよいが、②が①内の部分秩序であることは明らかだから、①と②の関係は一元論というべきである。「同型」は「同一」とは違うから②と③の関係は微妙だが、私の考えではこの理論は、原理論としては心身一元論に親和的である。ただしここからハイエクが、通常の一元論から導かれる帰結をほとんどすべて否定するという独自の結論を導くところが、この議論のポイントなのである。その結論だけに着目するなら、橋本の要約は正しい。

本書は、決して分析に終始しているのではなく、大きな視野からの提言も行っている。理論の進化という目的を明確にすると同時に方法よりマナーに定位する科学(倫理)論と、これと同根の成長論的自由主義などが示唆されている。これらはまだ未展開だが、我々はただ彼の次の作品を待てばよいのである。

[嶋津 格]